The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞1930～40年代における国共関係と中国の命運
Author(s)	李, 良志; 坂井田, 夕起子
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1994, 4, p. 61-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1930～40年代における国共関係と中国の命運

李　良　志
坂井田夕起子訳

1993年３月18日、中国人民大学教授李良志氏は大阪外国語大学アジア研究会の研究例会（中国現代史研究会と共催）において「三、四十年代的国共関係與中国的命運」と題して学術報告を行った。報告内容は、李教授の近著『度尽劫波兄弟在－戦時国共関係』（広西師範大学出版社、1993年２月）のエッセンスを紹介したものである。本稿は報告原稿の全訳である。訳出にあたっては、著書自身による改訂稿を底本とした。

なお、李教授の来日にあたっては、大阪外国語大学国際交流基金から資金援助を受けた。

中国国民党と中国共産党は中国近現代史上における最も強大なふたつの政党であり、両党の関係の如何が常に中国の情勢を左右し、また中国の命運とその前途を規定してきた。

国共両党は、半植民地半封建の中国社会においてあい前後して誕生し、共通の命運を有していた。両党の創始者はいずれも偉大な革命家であり、中華の振興と新中国の建設という偉大な理想を抱いていた。この共通性によって、両党は、あい合作して革命闘争を遂行する可能性を有していた。しかしながら、このふたつの政党の階級的性格に大きな違いがあり、また革命の指導思想・方法・戦略・戦術にも大きな差異があったため、両党は合作して革命を遂行すると同時に、両者の間で厳しい矛盾と闘争が発生する可能性も存在していた。

国共両党はその70年近い歴史において二度の合作と二度の分裂を経験した。両党の合作は、中国の歴史ひいては世界歴史に対して多大な貢献を成し遂げた。第一次国共合作は未曾有の国民大革命に結実し、中国の旧軍閥勢力と帝国主義侵略

勢力に重大な打撃を与えた。また、第二次合作によって中国民族の空前の統一と団結が生まれ、日本帝国主義侵略軍との8年にわたる血戦を遂行するとともに、連合国軍の支援を受けて抗日戦争の偉大な勝利を獲得した。このことは、世界反ファシズム戦争と世界平和に対する不滅の貢献である。

人々は国共の分裂を望んだわけでは決してなかったが、〔二度の－訳者、以下同じ〕分裂が起こったことは歴史的事実である。一度目の分裂は中国人民に巨大な苦難と損失をもたらした。さらに、日本帝国主義が虚に乗じて大挙して中国に侵入し、中国の広大な国土は日本侵略者に占拠・統制されることになった。二度目の分裂は、8年にわたる苦難の抗戦の後、中国人民にさらに3年間の内戦を経験させ、人民の生命・財産は多くの損失を蒙った。歴史は、南京国民政府と中華人民共和国政府のどちらも戦火の中から誕生したものの、その基本的性質には相違があったことを証明している。かつて、中国人民は中華人民共和国の成立に歓喜しそれをおおいなる誇りとしたが、冷静に考えてみると、その代価もまた非常に大きなものであった。もし、当時、中共とアメリカの（最初の）構想に沿って民主連合政府を具体化し、相互の妥協によって両党が譲歩していたならば、中国の命運はまた別のものになっていたかもしれない。

「天下の大事、分かること久しければ必ず合し、合すこと久しければ必ず分る」というが、この客観的法則は、人間の意思で変えることはできない。しかしながら、国共両党について言えば、合作の局面は分裂の局面よりも好ましいものであり両者の良好な関係が貴重なものであることは歴史が証明するところである。国家の安定と統一なしに経済の飛躍的発展は不可能であり、それが人民に最大の幸福をもたらすのである。私は平和主義者ではないし平和を乞い願うことはしないが、国内平和の実現のために最大限の努力を払う必要があると考える。同時に、私は、天と闘い地と闘い人と闘うということをいついかなる時期においても追求すべきであると考えるものではない。

1930～40年代の国共関係史を研究する際、合作を提起した貢献は誰に属し、分裂をもたらしたのは誰なのかという問題を提出することができる。第一次国共合作に対して、中共は論理と実践の両面において主導的役割を果たした。第二次国共合作の形成において、中共は統一戦線政策の制定に関して積極的役割を果たす

とともにその創始者でもあった。一方、国民党は合作に対する公然たる宣伝を行わなかったし、党内には根本的な反対さえ存在していた。しかしながら、同党は、実際行動において主動的かつ積極的方策を採用した。すなわち、国民党は四本のルートを通して中共との接点を捜し求め、合作抗日の交渉を行った。国民党もまた第二次国共合作の形成のために努力したのであり、その役割は無視すべきではない。

従来、蔣介石が抗日民族統一戦線に参加したのは迫られてのことであり、特に中共に迫られて参加したといわれてきた。こうした見方は一面的である。もし蔣介石が迫られたのだというならば、それは中共に迫られたのではなく日本帝国主義の中国侵略政策に迫られたのである。当時、蔣介石は、中共を全く取るに足らない勢力で一撃にも耐えられないと見なしていた。彼が中共を交渉の対象と考えたのは、中共を恐れたからでもそれを抗戦の中堅勢力と考えたからでもなく、彼の真のねらいはソ連の軍事的援助を獲得することにあった。すなわち、彼は、ソ連と同盟を結んで抗日し、国際的孤立から脱却することを企図したのである。

第二次国共合作の成立後、引き続き国民党が歴史的貢献を成し遂げたことを歴史は証明している。8年抗戦期の国共関係に「武漢時期」が存在したといわれている。この時期の国共関係は極めて印象深いものである。当時、蔣介石は、ソ連から帰国したばかりの王明を武漢に招請し、中共代表団の武漢常駐を許可し、周恩来を国民政府軍事委員会政治部副部長に委任して中共に政治部第三庁を組閣させ、中共が武漢において『新華日報』と『群衆週刊』を発行することを許可し、一部の中共指導者に対する国民党籍の回復を指示し、速やかに国民参政会を召集すべきであるという中共の提案を受け入れ、著名な「抗戦建国綱領」を公布し、いくつかの遊撃幹部訓練班を中共と共同で開設し、八路軍と新四軍に給与を支払った。これらのことは、衆目が認める事実である。総じて言えば、武漢時期は8年抗戦期のなかで国共関係が最も良好な時期であり、当時、両党は軍事上の共同抗戦のみならず政治・文化・外交の各方面において十分な合作を実行したのである。

同時に、8年抗戦期における両党間の矛盾と闘争は絶えることなく摩擦も間断なく発生したが、国民党と蔣介石は終始一貫して国共の合作と抗日を堅持し、この点に関して彼らは決して動揺しなかったということを指摘しておく必要がある。

我々の過去の歴史書は、武漢陥落後の国民党は消極抗日・積極反共であり「三度の反共高潮」を引き起こしたとして、中共の抗戦指導を強調してきた。私は、この観点には適切でない部分が存在し、トータルな評価としては不十分であると考える。

もし国民党が消極抗日・積極反共であったというならば、事態の展開は次のように解釈されなければならない。武漢陥落後、国民党の抗日の側面は戦争初期より弱まり、反共摩擦の側面が強まったものの、これ以降の反共は抗日を超えるものでは決してなかったと。歴史は、8年抗戦の全期間にわたって、国民党の抗戦堅持が終始主要かつ主流であり、その反共摩擦は全局面からみれば終始二義的かつ支流であって反共が抗日を凌駕することはなかったことを証明している。もし本当に抗戦期の国民党において本当に反共が抗日を凌駕していたならば、国共の分裂は、1946年や1947年ではなく1945年8月以前に起こっていたはずである。まさにこのことゆえに、私は、8年抗戦期に国民党が三度の反共高潮を引き起こしたという言いかたに同意しない。私は、1939年冬・1941年初めと1943年夏に国民党が引き起こした三回の摩擦は単なる反共のうねりに過ぎないと考える。1937年の七七事変から1945年8月の日本の無条件降伏に至るまでの時期において、中日の民族的矛盾が主要矛盾であった。国民党当局はこうした大局を考慮に入れて国内の団結と統一が有している重要な意義を重視した。彼らが発動した反共摩擦は、起伏を伴いながら時として激しいものとなったが、同時に、彼らはその収拾と妥協を図って反共摩擦を局部的範囲に限定した。これと相対応して、中共が採用した「人我を犯さざれば、我人を犯さず」、「磨して裂かず」、「理あり、利あり、節あり」の方針が完全に正しいものであったことに疑いはない。このように8年抗戦の全局面を観察すると、抗戦〔の堅持〕と勝利の獲得は〔国共〕両党と全国人民が共に関心を払う〔民族の〕命運にかかわる大事であり、両党共通の宿願であった。したがって、抗戦は全国〔政治〕の主流となり、終始一貫して時局〔を規定する〕高潮であったのである。

中共が抗戦を指導したという言いかたもまた不十分である。中共が指導したのは、敵後抗日根拠地の抗戦および八路軍・新四軍と解放区人民の抗戦であり、全民族の抗戦ではなかった。第二次世界大戦期における中国という反ファシズムの

戦場には大きな特徴があった。すなわち、中国の戦場には、完全に独立した国共のふたつの抗戦軍隊が存在し、並存しながら相互に支援・依存しあうふたつの戦場が存在し、独立したふたつの指揮中枢が存在していた。このような中国の戦場の独自性は、国民党が共産党の抗戦を指導したものでも、共産党が国民党の抗戦を指導したものでもないことを説明している。当然、このふたつの抗戦武装は、名目上は指揮＝被指揮の関係にあり、かつて中共は蔣介石が全国の抗戦の領袖であり最高統帥であることを公然と認めた。しかしながら、実際にはそれぞれが別々の戦闘を展開したのであり、ある時にはふたつの軍隊は戦略上の連携を有していたものの、協力せずに傍観する時もあり、友軍の失敗を他人の災いとして歓喜することさえあった。このような状況下において、どちらかの政党が〔中国の〕抗戦を指導したというような漠然とした言いかたをすることは果して可能であろうか？８年の抗戦において、中共はかつて政治面で主導的役割を果たし、全民族の抗戦に重要な影響を与えた。しかしながら、政治面での指導的役割と実際的な戦争指導はふたつの異なった概念であり、両者を同一視することはできない。

もちろん国民党が抗戦を指導したと言うならば、それも全く事実ではない。中共は百万の大軍と一億近い人口を擁する作戦区域を有しており、蔣介石は、〔中共軍の〕一兵卒たりとも動かすことができなかったのである。どうして国民党が全民族の抗戦を指導したといえるのだろうか？当時の中共は、蔣介石の命令に対して絶対服従の態度をとらなかったし、コミンテルンやスターリンに対してもまた、適切なものは聞き入れそうでないものは婉曲に拒絶したのである。

私は、中国の抗日戦争は国共両党が別々に指導して共同で遂行したのであり、誰が誰を指導するかという問題は存在しなかったと考える。８年抗戦において、国民党は前期の抗戦に対して非常に大きな貢献を成し遂げ、また中期と後期の抗戦においても引き続き貢献した。中共は、正しい戦略・戦術と傑出した指揮・組織能力および高い士気により、真に人民を発動した。このことによって、抗戦期における中共の役割と影響力はしだいに拡大するとともにその実力もまた徐々に強化され、中国抗戦の礎石となり、抗戦の勝利を勝ち取るうえで不滅の貢献を成し遂げた。しかしながら、この礎石となったということと、抗戦における統帥＝指導者の役割〔を果たしたということ〕とが同じではないことは明らかである。

抗戦の全過程において、国共両党の摩擦と闘争は終始一貫して存在していただけではなく、時としてそれは相当激しいものであった。私は、この国共間の矛盾と闘争に対して、国民党と蔣介石に主たる責任があると考える。というのは、中共が指導する八路軍と新四軍が深く敵後に入り込み、作戦を開始して以降、国民党は、中共の敵後での活動を様々に制限しようとし、とりわけ敵後における中共の発展を制限しようと企てた。しかしながら、蔣介石は、敵後における中共の迅速かつ猛烈な発展に対して有効な対応策を講じることができなかった。こうして制限と反制限は、抗戦期における両党間の闘争の主たる内容となった。もともと、蔣介石は、中共が敵後の抗戦によって日本軍に消滅させられるであろうと考え、日本軍を利用して政治的目的を達しようと目論んでいた。しかしながら事は意に反し、中共は消滅させられなかっただけではなく、迅速に足場を固めて自己の力量を急速に発展させ、彼の目論みは成就しなかった。このため、蔣介石は、共産党の取り消しや両党の合併という政治・組織問題をつぎつぎに提起した。これに対して、中共は、断固たる闘争で応え、民主党派と人民の支持を獲得した。彼はまた、懲りることなく軍事上の摩擦をたびたび引き起こした。

抗戦期における蔣介石の反共の核心は、敵後での中共の猛烈な発展に対する嫉妬にあった。それならば、この時期の中共は、結局のところ自己を発展させるべきではなかったのであろうか？この点に関して中共に誤りがあったのであろうか？この問題に答えることはさほど困難ではない。中共は抗戦を望み勝利の獲得を望んでいたが、そのためには発展が不可欠であった。これは天地の大義であって非難を受けるいわれはない。毛沢東は中共の発展に賛成していただけでなく、国民党の発展にも賛成していた。彼は、全民族の根本的利益から問題を考察して両党ともども発展すべきであるという考えを堅持したが、それは決して便宜的な策謀や宣伝ではなく、民族的抗戦力の迅速な強化・拡大を誠実に希求していたのである。

敵後において、中共は、国民党がいうように本当に「游して撃さず」であったのだろうか？この点について、毛沢東は、我々は移動しては攻撃し攻撃しては移動したと述べている。中共の軍隊と日本軍との大規模な戦闘は確かに少なく、この点で国民党〔の軍隊〕に比べるべくもない。その一方で、小規模の戦闘は決し

て少なくなかったのである。この時期、中共は、まず自己の保存を重視して発展を求め、有利な状況のもとでのみ戦闘を行ったが、これもまた必要かつ正しい〔戦術〕であった。このほか、階級闘争と民族闘争を結合し、民族闘争のなかで自らの階級的利益を獲得し、階級闘争を民族闘争に服従させるという毛沢東の理論もまた、正しいものであり非難されるべきものではない。

では、抗戦期の国共摩擦に関して、中共側には全く問題が存在しないのであろうか？冷静に考察すれば、中共の側にも検討を要する部分が存在する。なぜなら、我々の反摩擦〔闘争〕は全てが防御的なものであったのでは決してなく、いくつかの地区における統一戦線工作において「徹底的に〔国民党の〕土台を堀り崩し」たからである。敵後の反摩擦〔闘争〕では、国民党の頑固派部隊に対する我々の攻撃は非常に激烈なものであった。例えば、蘇北の新四軍は何度かの戦闘を経て十万の韓徳勤軍を撃滅した。特に1940年10月初めの黄橋戦役では一万余人を殲滅し、多くの高級将官が戦死し捕虜となった。1942年、陳毅は、この戦役のあとに第二次反共高潮が発生し、「さらに皖南事変の遠因となった」と総括した（「いくつかの重要戦役についての総括」）。

抗戦期に国共摩擦が頻発したにもかかわらず、総じていえば、国共両党はどちらも大局に心を配り摩擦を起こしても分裂を回避するという方針を立て、８年の抗戦を堅持してその最終的勝利を勝ち取った。このことは、中華民族が巨大な凝集力を有していること、日本帝国主義が当時この凝集力を無視し歴史的な誤りを犯したことを説明している。

1930～40年代における国共合作の最も重要な意義は、民族の分裂と内乱を克服し、全民族が団結して抗日のための強固な核心をうちたて、８年の抗戦を堅持して日本侵略軍に間断なく打撃を与え、最終的勝利を獲得して日本の植民地に転落するという中国の命運を根本的に改変したことである。第二の意義は、戦争のなかで、中共は強大な実力を蓄えると同時に治国安民を図るうえでのさまざまな貴重な経験を蓄積し、1949年10月における新中国樹立の基礎を固めたことである。

抗戦が終結したとき、中共は、〔８年抗戦期における〕空前の発展によって強大〔な政治勢力〕となっていたが、依然として国共の長期合作方針を堅持し、戦後の和平建国を希望していた。中共は、民主連合政府の樹立を真摯に呼びかけた。

もし、当時、蒋介石の指導する国民政府が一党独裁を放棄して政治改革の推進を希求していたならば、第二次国共合作は引き続き発展し、中国は新三民主義の道を歩む可能性を有していた。当時の蒋介石は、自らの強大さを過信していただけでなく中共の潜在能力を軽視し、アメリカという後ろ盾があれば中共を一挙に消滅できると考えた。蒋介石の願望は徹底的に打ち砕かれ、3年余りの後、彼は中共に打ち負かされて大陸から撤退し、台湾に盤踞することとなった。一方、中国は社会主義と人民民主独裁の道を進み、新しく生まれかわった。

1956年に出版した『中国のなかのソ連』の中で、蒋介石は彼の失敗を総括し、最も根本的な問題は第二次国共合作を行ったことであるとし、これは根本的かつ戦略上の誤りであり、一生涯恨みに思いいくら悔やんでも悔やみきれないと述べた。しかしながら、当時、彼は何故に中共と合作しようとしたのであろうか？当時、合作しないという選択枝が存在していたのであろうか？蒋介石は、当時の彼が内外とも苦境に陥っていたことを忘れてしまっているのである。また、第二次国共合作にはどのような不都合があったのであろうか？〔合作の成立によって〕民族を救うことができただけでなく、彼自身いかなる損失も被らなかった。〔それのみならず、〕彼の威光と人望は空前の高まりをみせ、国民党の力量は空前の強大さとなり、中国の国際地位も大いに向上した。〔合作〕以前、人々は彼の「安内攘外」と対日妥協政策を批判したが、合作の後、彼は西安事変前の苦境を脱し、人々は彼を民族の領袖・抗戦の最高統帥と称賛した。実際のところ、第二次国共合作によって、中共は彼のために骨を折り彼を救済したのであって、彼は中共を恨むべきではないのである。蒋介石の失敗は、彼〔自身〕の根本的な誤り－一党独裁政策－に求めるべきである。戦後、もし彼が「一国両制」の抱負をもって容共政策を展開し、中共との分権統治を実施していたならば、彼は〔国家の〕指導的地位を保持することができ、また、中国には新しい国体・政体と新経済モデルが誕生していたかもしれないのである。

第二次国共合作の分裂の後〔1946年〕、国共両党はそれぞれ別の〔社会〕制度・進路を選択してあい競い合うこととなった。それ以来半世紀の間、両党はそれぞれの成果を獲得した。すなわち、台湾の経済発展は世界が注目するところである。台湾島における資本主義の存在は決して不都合なことではなく、その国家民族に

対する意義は軽視しえない。台湾における多くの経験は総括し参考にする価値があり、また我々の思考を啓発するものである。一方、大陸では、祖国の統一と民族の団結および経済・国防・科学技術の発展などの各方面において顕著な成果があった。しかしながら、政権奪取後、中共には傲慢さと尊大さが見られるようになり、ソ連モデルに盲目的に追従し、時代遅れとなった某かの教条に思想的に拘泥し、門を閉ざして外界との往来を絶ってしまった。これらは大陸における生産力発展に深刻な影響を与えただけでなく、人民に数々のあるべからざる苦難を背負わせた。

歴史は、国共両党のいずれもがそれぞれの長所と有益な経験を有しており、相互に啓発しうることを証明している。今日、中共は、従来の成果を基礎として新たな戦略に転換し、改革開放政策を推進して先進工業国を猛追し、その姿は一新しつつある。今日、国共両党が再び手を携えて共に歩むならば、両岸の人民にとっても国家民族にとっても有益である。両党は、過去において中国の命運を決する核心的勢力であったが、現在においてはなおさらそうである。今日、両党の一方が他方を消滅させることは困難であり、唯一の正しい原則はその合作である。多極的・多元的な現代世界において中華民族が追求すべきものは民族の融合と全国の統一・団結であり、分離や分裂ではなく内戦では決してない。私は、両党が速やかに手を携えて合作し、新中華の建設と中華民族の振興をめざしてそれぞれの貢献をなし、炎帝黄帝の子孫としてのそれぞれの天職を尽くすことを希望する。国共両党はそれを行う能力を有しているが、問題は、1930～40年代に共同で対外侵略に当たったのと同じく、今日においても再び協力して建国に当たれるかどうかである。今日、外国のいくつかの勢力は、台湾が祖国に復帰して中国の統一が実現することを阻んでいる。彼らはまた、香港・マカオ・台湾・大陸を包括する新経済圏が出現することを恐れている。このため、我々は十分に警戒し、中国の分裂を固定化しようとする彼らの試みを成就させてはならない。国共両党が手を携えて合作する日は中華が再び飛翔する時なのである。